

「わかちあい」の共同体を求めて

山 本 俊 正

1990年代に IT 革命と呼ばれる世界のグローバル化が始まりました。21世紀に入ると、このグローバル化は、さらに急速に進みました。政治、経済、科学の分野ばかりではなく、私たちの日常生活においても、大多数の人が、その便利さを享受し、謳歌するようになっていきます。インターネットを通じて、私たちは瞬時に世界と繋がるのが可能になりました。素晴らしいことです。しかし、これらの便利さがある一方、グローバル化の負の側面も指摘されています。

明治以降、日本の近代化の大きな特色の一つは、資本主義的な市場経済を形成することでした。この大きな目標を達成するためには、私たちがより科学的に思考し、合理的な精神の持ち主となることが期待されました。しかし、この目的の促進にとって大きな壁となっていたのは、農村や山村における共同体の存在でした。またその共同体を構成する基本的な原理でした。伝統的な社会においては、伝統的な価値観と倫理があり、それに従って生活していればよかったのです。人々は同じ共同体の中で助け合って生きていました。そこには安定した人間関係があり、社会における秩序も倫理も安定していました。しかし、近代化のプロセスは、また、その帰結としての経済のグローバル化は、伝統的共同体を「遅れた」社会として解体し、格差社会を生み出し、人と人との、関係性を希薄にしてしまったのではないのでしょうか。

キリスト教の初期の共同体では、「一人として持ち物を自分のものと言う者はなく、すべてを共有していた」（使徒言行録 4：32）という聖書の記述があります。礼拝をする前には、空腹のまま神に祈る者がいないように、皆が一緒に食べてから礼拝することも行なわれていたようです。これをアガペ・ミール（Agape Meal=愛餐）と呼んでいました。これに近似した「わかちあい」の伝統は、形を変えて、日本だけでなく、世界の様々なところで、共同体の原理として実践されてきました。今、私たちが、「グローバル」な世界に生きる意味を「わかちあい」の共同体の視点から考えてみたいと思います。

（院長補佐）